ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　ぽつりぽつりと雨音が響く今日この頃。五月は特筆すべきイベントもほとんど無く、あっという間に過ぎていった。六月、それも終わり頃にもなれば、大半の新入生は学校に馴染んでいる頃で、それは今、田島道場の周りを走っている小学生男子も例外では無い。黒いレインコートに身を包み、顔を火照らせながらランニングをしている彼は雅也。太一と神楽意外にも、だんだんと仲良くなる子が増えていき、クラスではそここそ上手くやっていた。拓馬のお陰で、成績も叱られない程度の水準は維持している。

　日課のランニングは既にノルマを七周程オーバーしていた。ちなみに、ここ最近、雅也は日課のランニングを最低ノルマの十週はオーバーすることにしている。密猟者達と戦ったあの日から、ああいう輩と戦うための訓練を受けることになったからだ。ポケモンは勿論のこと、トレーナー自身も鍛える必要がある。最も、ランニング自体はそれまでも普通にやっていたし、今のところ、雅也自身は特に特別な練習はしていない。精々、練習メニューに、スクワットや腹筋といった『基礎トレーニング』が加わったくらいである。ポケモン達の訓練も、戦うためとは言いつつも、基本的には『逃げる』ことを重視した練習をしているのが現状だ。

　とは言え、雅也はあまり焦っていない。どうせ、ジャックとは暫くは会うことも無いだろうし、あの密猟者達のような人とも、普通に生活をしていれば、そうそう会うこともあるまいと考えているからだ。まずは、少しずつでも確実に強くなることが、今の自分にとって必要な事だと雅也は感じていた。

　しかし、そんな雅也は、今は表情が暗い。スニーカーに水が染みて不快なのは勿論のこと、そもそも彼は六月があまり好きではないのだ。好きじゃない理由としては、やはり、雨の多い季節だからだろう。

「全く……」

　雅也の口から、息も絶え絶えになっているにも関わらず、そんな呟きがはっきりと漏れるのが分かる。目線は、今自分を追い越していった、三匹のポケモンだ。一匹はピカチュウ。あの密猟者達との戦いで、ピチューが進化したポケモンである。もともと走るのが得意な奴だが、進化してさらにその力が伸びたようだ。今はもう、雅也を五回は追い抜いている。

　もう一匹はゼニガメ。このポケモンも、あの事件の後捕まえた。いつもは雅也の後ろをついてくるだけなのだが、雨が降っている日は別らしく、雅也を周回遅れにする程、体力と走力が上がるようだ。特性が『すいすい』でもないのに、この原理は一体どういうことなのだろうかと、雅也は不思議でならない。

　それでもって、その二匹よりテンション高くはしゃいでいるのが、オレンジ色の皮膚を持った、直立のトカゲのポケモンだ。

　このポケモンはヒトカゲ。尻尾に炎を灯しており、この火が消えると死ぬ……というのは実はデマで、『死んだ時、尻尾の炎が消える』というのが正しい。この炎は感情によって強さが変わる。今、炎は雨に晒されているが、火は消えるどころか勢いをさらに増していた。

　勿論、これは雅也も周知の事実なのだが、それでも彼は不安そうにヒトカゲ……の尻尾の先を見つめていた。

　このヒトカゲは、つい先月、雅也が捕獲し、パーティーに加えたポケモンだ。最近ゼニガメを捕まえたのに何故？　と思うかもしれないが、実際問題、ゼニガメと他の三匹のポケモン達とでは、実力に差がありすぎて、練習にならなかったのだ。そのため、ゼニガメの練習相手として丁度良い相手を探していたのだが、その時出会ったのが、このヒトカゲである。

　最初の数日は、ただのゼニガメの対戦相手としてしか見ていなかった――どうやら、この近くに住処があるらしい。そこら辺に行くと、このヒトカゲはいつも木の上でクラボの実を食べていた――雅也だが、何度か戦っている内に、だんだんと彼のポケモン達とヒトカゲが仲良くなっていったので、どうせなら手持ちに加えてしまおうと考えたのだ。ちなみに、田島辰巳曰く、世話さえ自分でしっかりやれば、別に問題は無いらしい。近くに実力が近いライバルが出来たことで、ゼニガメもヒトカゲもだんだんと強くなってきた。今では、パーティーの戦力として、充分バトルを任せられるようにはなってきていると、雅也は感じている。

　とはいえ、理屈や強くなってきている事実は頭では分かっていても、この雨の中、ヒトカゲを裸で走らせておくには抵抗があるのか、雅也は溜息を吐く。道場の前辺りに差し掛かった時、三匹にランニングを終えるよう指示し、自分も道場の中へと入っていった。

　ちなみに、雅也の手持ちの残り二匹だが、その二匹はノルマを終えると、早々に道場へと引き上げていった。そのうちの一匹は、今雅也の目の前にいる。

「あー……フシギダネ、お疲れ」

　玄関のすぐ近くで、雅也はそのポケモンをじぃっと見つめてから、そう声を掛ける。話しかけられたフシギダネは、顔だけ主人の方に向けて鳴き声を上げると、すぐに今自分のやっていることに集中する。フシギダネは今、二本の蔓だけで、人間で言うところの腕立て伏せに近いことをやっていた。

どうやら、蔓の力を上げるためらしい。

　何故、そんなことが分かるのか。人間とポケモンは、具体的な意思疎通を図ることは難しい。田島辰巳のような達人クラスにもなれば話は別だが、雅也はまだその域まで達せていない。

　その理由を思い出した雅也は、再び溜息を吐くと、離れにある書庫に向かった。そこに、その理由がある……いや、いる。

　雅也の、残る最後のポケモンが、その理由だった。

　離れの木造建築の書庫は、田島辰巳が全国から集めてきた、ポケモンに関するあらゆる本がしまわれている場所だ。流石に図書館とはいかずとも、小さい本屋なら充分開ける。

　雅也はノックをしてから、戸を引いて、中に入る。中は暗いかと思いきや、既に小さな豆電球が頼りなさそうについていて、ちょっと茶色く薄暗くなっている程度である。

「こっちはランニング、終わったよ」

　雅也はそう言いながら、奥に進む。多くの本棚が無造作に並んでいたり、一部は床に散らばっていたりで、中は入り組んでいるのだ。奥に進むにも、実は慣れていないと一苦労する。

「……あれ？　ここにいるよね？」

　返事がないので、声を少し大きめにしつつ、雅也は進む。もしこれでいなかったら、電気をつけっぱなしにして何処かへ行ったことを叱らないといけない。

　だが、そんなことは杞憂だったようだ。目当てのポケモンは、奥で本を読むのに夢中になっていた。その後ろ姿を暫くボーッと眺めてから、雅也はポケモンの肩をツンツンと叩く。

「ねぇ、その本面白い？」

　何やら、分厚くて文字がたくさん並んでいるページに軽く酔いながらも、雅也は聞いた。

(むぅ……中々興味深い事が書かれているから、どちらかといえば面白い。雅也もどうだ？　読んでみるか？)

　そのポケモンは振り向いて、そう喋った。

　手の甲についた刺。長い耳と尻尾。青い胴体。

そして、波動……だと思われる物を使って会話が出来るようになった、波導ポケモン、ルカリオである。

「……えっと……ごめん。いいや」

(そうか……)

　残念そうにそう言ったルカリオは、読んでいた本を本棚に戻す。

このルカリオは、数週間前、雅也のリオルが進化したポケモンだ。何故、会話が出来るようになったのかは、当の本人や雅也は勿論の事、田島辰巳でさえ分からない。恐らく、波動を使っているのでは無いかと推測したものの、これが正しい根拠はどこにも無いのだ。

　進化して暫く経つが、雅也は未だに、ポケモンが喋ることには慣れない。ちなみに、ルカリオが喋れることを知っているのは、道場にいる人だけである。

(そういえば、どうした？)

　どうやら、ルカリオは本に夢中で、主人の声が聞こえなかったらしい。呆れたように溜息を吐き、雅也はもう一度言う。

「だから……そろそろ練習試合の時間だって」

(もうそんな時間か。ここは時計が無いから、時間の感覚が無かったな。すまなかった)

　そう言ったルカリオを、雅也はボールに戻す。

　事の起こりは、ルカリオが進化した、数週間前の事だ。